

原著

高次脳機能障害をもつ当事者の視点からみた社会適応

石元 美知子¹⁾, 和田 寿美²⁾, 瓜生 浩子³⁾

Social adaptation from the perspective of parties with higher brain dysfunction

Michiko Ishimoto¹⁾, Sumi Wada²⁾, Hiroko Uryu³⁾

要 旨

今回、当事者が社会や環境との関係の中で、自分自身の状況や自己を取り巻く環境をどのように捉えているのかを明らかにすることを目的として、高次脳機能障害者とその家族及び支援者が全員女性であるピアサポートグループ『女子会』での当事者の会話内容を分析した。その結果、会話内容は、次の5つのカテゴリに統合された。1) 当事者が学校・職場、種々の参加の場で活動し役割を持っている、またはその集団に存在していると感じている、及び当事者がやりたいと思っている好きな活動をしている《自分も社会の一員として活動できている》、2) 自らの障害を自覚しながらも、就労や就学、種々の参加している活動で、目的や目標を持ち自己の能力を高めようと行動している《障害があっても前を向いて自分なりに努力している》、3) 仕事選択や就労における不安や家族生活上の困り事、あるいは障害に伴う様々な不安がある《社会生活・家族生活上の困難や不安がある》、4) 自分の周囲に自分と家族を支えてくれる環境がある、またそのような環境に支えられているという実感を表す《自分を支え守ってくれる環境がある》、5) 周囲の人や社会の人に障害や自分自身を理解してもらえず、自分らしくいられないことへの不満や辛さ、失望などを表す《自分の障壁となる環境や状況がある》。

キーワード：高次脳機能障害、当事者、ピアサポートグループ

Abstract

The purpose of this study was to clarify how the parties perceive their situation and the environment surrounding them in relation to society and the environment. To that end, we analyzed the conversations of the parties in the Peer Support Group “Women's Association” in which all persons with higher brain dysfunction and their families and supporters are women. The conversation content has been integrated into five categories. Those categories were 《We are active as members of society》《Even if you have a disability, look forward and make your own efforts》《Have difficulty or anxiety in social and family life》《There is an environment that supports and protects us》and 《There are environments and situations that are our barriers》.

Key words : Higher Brain Dysfunction, Parties, Peer Support Group

-
- 1) 高知リハビリテーション専門職大学 作業療法学専攻
Division of Occupational Therapy, Kochi Professional University of Rehabilitation
 - 2) 近森リハビリテーション病院 リハビリテーション部
Department of Rehabilitation, Chikamori Rehabilitation Hospital
 - 3) 高知県立大学 看護学部
Faculty of Nursing University of Kochi

【はじめに】

高次脳機能障害は“見えにくい障害”であることから、当事者も障害を認識することが困難であると同時に家族の戸惑いも大きい¹⁾。また、外見からは障害が分かり辛いことで、周囲から理解されにくく社会生活を送る上で大きな障壁となる²⁾。退院後に自身の生活上の“違和感”を抱きながら生活している当事者もいる³⁾。当事者は“生活のしづらさ”を感じながら過ごす中で自分の状況に気づき、自己の障害と折り合いをつけながら生活している。当事者と当事者を抱える家族が同じ立場同士で支え合う目的で、2003年に『脳外傷友の会高知青い空』(2005年『NPO法人脳外傷友の会高知青い空』, 2017年『NPO法人脳損傷友の会高知青い空』に改称)が発足した。そして、“女性だけで集まりたい”というニーズに応えるため、2011年1月より月に1回2時間程度、『青い空』の一部門として『女子会』を始めた。『女子会』は、参加者が女性限定の当事者と家族(母親・妻・姉妹・娘・祖母)、女性支援者2名(臨床心理士・作業療法士)のピアサポートグループである。メンバーは当事者19名、家族32名で、ミーティングでは自己紹介と近況報告の後に、テーマを決めずにその都度参加者の気になっていることを話し合う。また、年に数回、高次脳機能障害についての学習、料理などの作業活動、花見や外食、施設見学などを行っている。

我々は、前報で、この会の家族の会話分析により、母親と妻の抱える問題を明らかにした⁴⁾。今回はこの会に参加している当事者の会話内容を分析した。当事者の視点を調査した研究として、高次脳機能障害者の職場定着要因を明らかにすることを目的とした当事者へのインタビュー調査³⁾があるが、このような研究は少ない。これは、障害を認識することの難しさがこの障害の障害特性である³⁾ことや、特に自分の気持ちを話すことが難しい⁵⁾ことが要因の1つであると考えられる。和田⁶⁾は、当事者の退院後の「暮らしの再生」は急務であるが、当事者主体という視点が支援者側にあるかどうか大きな鍵になると述べている。よって、今回、当事者が社会や環境との関係の中で自分自身の状況や自己を取り巻く環境を

どのように捉えているのか、当事者の視点で明らかにすることを目的とした。

【方法】

ミーティング時の当事者・家族の会話内容は、毎回2名の支援者ができる限り個々の参加者の話をそのまま記述し、逐語メモとしている。今回、2011年1月から2019年8月までの間で、食事会や見学などのイベントを除きミーティングを行った計80回の会の逐語メモから、当事者の会話内容を抽出し分析対象とした。

1. 対象者の概要

対象とした当事者の概要を表1に示す。対象は、ミーティングで会話記録のある16名で、主な高次脳機能障害は、記憶障害、注意障害、感情障害、遂行機能障害、空間認知障害、言語障害である。ミーティング中は、当事者の疲労により離席や途中退席できる環境にしている。また、当事者の状態や人数により全員でのミーティングを1時間程度とし、当事者だけで話し合いや創作活動などを行う場合もある。当事者の発言は、短い自己紹介や近況報告か、言いたいことを上手く伝えることが難しく回りくどい話になることも多いが、支援者や参加家族が話を引き出すように援助している。

2. 分析方法

会話内容の分析には、質的統合法(以下、KJ法)⁷⁾を用い、1つの概念で1つのラベルを作成した。1文に2つ以上の意味が含まれるものは各々1文としての価値を与え1つのラベルとした。尚、個人を特定するような会話内容や分かり辛い会話内容は、文脈や語り手の意図を歪めない範囲で表現を整えた。グループ編成では、内容が近いラベルを集めてサブカテゴリ化し、さらに意味合いが近いサブカテゴリを集めカテゴリ化した。そしてより抽象度の高い最終カテゴリを作成した。カテゴリ化では、信頼性・妥当性を確保するため質的研究の経験者とともにを行い、研究者間で意見の一致を見るまで討議を繰り返した。

会話内容の分析にあたり、会話内容の提示には個

表1 当事者の概要

	発障時の年齢	参加開始時の年齢	原因	家族との属性	参加時の就学・就労状況
A	10歳代前半	10歳代前半	外傷	娘	就学～一般就労（障害者枠）
B	10歳代半ば	10歳代半ば	脳炎	娘	就学～福祉就労
C	10歳代後半	20歳代前半	外傷	娘	福祉就労
D	20歳代前半	20歳代前半	脳血管障害	娘	福祉就労
E	30歳代	30歳代	外傷	娘	一般就労（障害者枠）
F	30歳代	30歳代	脳炎	娘	福祉就労
G	30歳代	50歳代	脳血管障害	娘	福祉就労
H	40歳代	50歳代	脳血管障害	妻	なし
I	50歳代	50歳代	脳血管障害	母・妻	なし
J	50歳代	50歳代	脳血管障害	母・妻	なし
K	50歳代	50歳代	脳血管障害	母	なし
L	50歳代	50歳代	脳血管障害	母	福祉就労
M	50歳代	50歳代	脳血管障害	母	一般就労
N	50歳代	50歳代	脳血管障害	娘	なし
O	50歳代	50歳代	脳血管障害	母・妻・娘	なし
P	50歳代	60歳代	脳血管障害	母・妻	なし

人を特定しないよう配慮した。また、発表にあたり当事者及び家族からの承認を得た。

【結果】

抽出したラベルの総数は322で、分析により75の1次カテゴリと32の2次カテゴリに整理され、さらに再グループ化を行い5の3次カテゴリに統合された。〈 〉は2次カテゴリ、《 》は3次カテゴリ、「 」は当事者の会話、（ ）は研究者による補足を示す。3次カテゴリは、《自分も社会の一員として活動できている》《障害があっても前を向いて自分なりに努力している》《社会生活・家族生活上の困難や不安がある》《自分を支え守ってくれる環境がある》《自分の障壁となる環境や状況がある》と命名した。3次カテゴリを構成する下位カテゴリを表2に示す。

1. 《自分も社会の一員として活動できている》

当事者が学校・職場、種々の参加の場で活動し役割を持っている、またはその集団に存在していると感じている会話内容、及び当事者がやりたいと思っている好きな活動をしている会話内容を《自分も社会の一員として活動できている》とした。

〈職場・学校で役割や課題ができていいる〉は、「学校で手芸をしている」「洗濯と皿洗いの仕事をしている」という課題や仕事ができていること、「事業所内の仕事の他に販売の仕事も始めた。色んな人と出会えて楽しい」という新しい仕事が追加された自信、「作業所で園芸部に入って花壇の世話をしている」という仕事以外の役割を任されている自信、「事業所のトイレ掃除はチェックリストがあるのでできる」という工夫することで一人前の仕事ができるという自信を実感しているものであった。種々の参加の場では、「体育館で一般の人達と卓球をしている」「趣味の楽器演奏をしている」など〈参加の場があり好きな活動をしている〉ことや、「友人の結婚式に出席した」など〈フォーマルな会に出席できた〉ことへの自信、また、女子会に参加して「分かってもらえないから（他では）言わなかったが、みんな一緒ということが分かって良かった」「みんなで行ったランチが楽しかった」など、〈女子会の一員として一緒に場を共有できている〉という自己の存在への自信を実感していた。また、家族内では、「母や妹のイベント参加に付き合いで一緒に行ってあげた」

表2 当事者の会話内容

3次カテゴリ	2次カテゴリ	1次カテゴリ	コード数			
自分も社会の一員として活動できている	職場・学校で役割や課題ができています	仕事をしている自信	31	48	48	
		学校で活動ができています	1			
		職場で新しい仕事を始めた自信	5			
		難しい仕事をしている自信・意欲	2			
		能力が認められ職場で役割を任されている自信	3			
		仕事・社会的役割をもっている自信	3			
	参加の場があり好きな活動をしている	環境を工夫して仕事ができている自信	3	10	24	106
		参加できる活動の場がある自信	5			
		趣味や好きな活動をしている自信	5			
	フォーマルな会に出席できた	フォーマルな会に出席し旧友と交流できた自信	3	3	11	15
		女子会に参加できた自信	2			
	女子会の一員として一緒に場を共有できている	女子会で皆で楽しみたい希望・意欲	4	5	15	19
		女子会で共感が得られた安心	5			
		娘としての役割を果たしている自信	6			
	家族の一員として存在し役割を果たしている	母親役割を果たしている自信	4	4	15	19
		子供の成長への安心	4			
		ペットの世話をしている自信	1			
	障害があっても自分らしい生活ができています	障害があっても日常生活を送れている自信	12	5	19	19
以前の役割が再びできるようになった自信		5				
張りのある生活を送っている自信		2				
障害があっても前を向いて自分なりに努力している	就学・就職活動、将来の仕事への期待がある	現在の仕事における将来の目標・意欲	5	10	15	
		復職が決まった安心	1			
		自分に合った仕事に就くことを目指す意欲	1			
	職場の障害理解を得るために行動している	就学・就職活動への挑戦	3	2	5	13
		自己の就労や働きぶりが障害者雇用に貢献している自信	2			
		良好な人間関係を築きながら仕事ができている自信	2			
	活動に参加し能力向上のために努力している	職場で障害理解を得るために頑張っている努力	1	5	8	7
		自己を向上させる会への参加意欲と参加行動への自信	5			
		自己能力の向上・発揮を目指した活動をしている自信	6			
	人に役立ち認められる活動をしている	自身の感情管理のための趣味や活動をしている自信	2	3	8	20
		人から認められる・期待される趣味を持っている自信	3			
		他者の役に立つ活動をした自信	1			
	自分がやりたいことを楽しめている	他者との参加の場がある、友人が居る	4	6	7	7
		行きたい所に行けた自信	6			
		楽しみな計画への参加予定がある喜び	1			
	女子会に主体的に参加し役割を果たしている	女子会で役割を果たしている自信	17	3	4	4
		主体的に女子会を作ることへの意欲	3			
		健康維持のための行動への自信	5			
自ら健康維持、機能改善に取り組んでいる	機能改善のための行動への自信	1	1	7	7	
	健康のために自己抑制できた自信	1				
	家族の一員としての役割を社会的に果たした自信	3				
自立した存在として家族に認められたい	自立生活を始めることへの自信	1	4	4	24	
	娘との衝突を避け関係を維持するための努力	4				
	障害特性を踏まえ対策を立てることができている自信	6				
障害に上手く対応できるよう努力・工夫している	障害改善の取り組みを続けている自信	3	3	8	9	
	環境を工夫して家事や仕事ができている自信	3				
	障害による困難さを抱えながらも活動しようとする意欲	3				
障害があっても前を向いて歩みたい	障害をポジティブに捉え前に向かって努力しようとする意欲	5	7	9	9	
	社会に認められる権利の主張	7				
	社会への障害理解への意欲	1				
社会生活・家族生活上の困難や不安がある	仕事選択・就労困難な社会的状況への不安がある	自己の就労が障害者雇用に貢献している自信	1	4	8	12
		仕事選択への不安	4			
		就労困難な状況への不安	4			
	職場環境の変化への不安がある	復職や職場環境の変化への不安	4	4	4	10
		自己の健康への不安がある	10			
		体調不良・健康への不安	10			
	家族関係・家族役割上の困難感がある	子供との距離・関係づくりへの困難感	3	3	6	14
		母親役割が果たせない無力感	3			
		親や子供の体調や生活に対する心配	5			
	家族生活上の懸念事項がある	生活への経済的不安	1	2	2	31
		頼れる家族の不在による不安がある	2			
		家族の存在を欠いて頼れないことによる不安	2			
頼れる家族の不在による不安がある	障害による生活上の不具合がある	31	31	33	26	
	障害への対応が上手くできない不安がある	1				
	環境変化への適応不安	1				
自分を支え守ってくれる環境がある	安心できる職場のサポート環境がある	4	4	4	8	
	自分を理解し支えてくれる家族がいる	3				
	子供の理解と協力への感謝と安心	3				
自分と家族を支えてくれる専門職者がいる	姉妹の協力への感謝と安心	4	11	14	8	
	両親の理解と協力への感謝と安心	3				
	夫の理解・協力への安心	1				
共感し合えるピアサポーターがいる	家族関係を調整してくれる専門職者がいる安心	2	3	3	5	
	受診時の医師との対話により得られた安心	1				
	同じ障害を持ち共感できる人の存在	8				
自分の障壁となる環境や状況がある	環境や健康状態によってやりたいことができない	5	5	5	14	
	家族に理解してもらえない辛さがある	5				
	社会に理解されていないことを実感する	1				
環境や健康状態によってやりたいことができない	環境や健康状態から活動を妨げられることへの不満・諦め	5	5	5	8	
	家族の障害への無理解・非協力に対する不満	5				
	子供扱いされ対等になれない家族関係への不満	3				
家族に理解してもらえない辛さがある	社会の障害への無理解に対する失望	1	1	1	1	
	子供扱いされ対等になれない家族関係への不満	3				
	社会の障害への無理解に対する失望	1				

という家族の役に立っていること、「子供のことを心配していたが入学が決まり安心した」という子供を気遣う母親の役割を果たしていることなど<家族の一員として存在し役割を果たしている>を感じていた。自己の障害については、「家のことは何でもできるようになった」「自分で家計簿を付けている」「人の話を流せるようになったので良くなったと思う」などの<障害があっても自分らしい生活ができている>と自己肯定感を抱いていた。

2. 《障害があっても前を向いて自分なりに努力している》

自らの障害を自覚しながらも、就労や就学、種々の参加している活動で、目的や目標を持ち自己の能力を高めようと行動しているという会話内容を《障害があっても前を向いて自分なりに努力している》とした。

就労・就学では、「分別作業で検品ができることが目標」「就職を目標に職業センター実習中である」「入学試験に挑戦した」など<就学・就職活動、将来の仕事への期待がある>、「自分がこの会社で第1号の障害者雇用になった」「職場では障害をオープンにしている、差別を感じることはない」など<職場の障害理解を得るために行動している>であった。参加している活動では、「朗読もしようと思って勉強会に参加している」「コンクールに向けて練習中」など<活動に参加し能力を向上のために努力している>、「従妹へのプレゼントのために編み物をしている」など<人に役立ち認められる活動をしている>、「事故前に行っていた美容院に、初めて一人でバスと徒歩で行って嬉しかった」「県外の美術館に行ってきた」など<自分がやりたいことを楽しめている>、「女子会に参加してくれる他の当事者の考えも聞きたいので、もっと当事者を探したい」など仲間を増やしたいという<女子会に主体的に参加し役割を果たしている>意欲であった。また、健康面では、「仕事が変わって肩がこるのでストレッチなど自分でできることをやっている」「一万歩を目安に毎日歩いている」など<自ら健康維持、機能改善に取り組んでいる>と認識していた。家族内では、「子

供だけど、いつまでも子供っぽくするのは難しい」「2世帯別居を始めた」など<自立した存在として家族に認められたい>という思いを持っていた。自己の障害については、「書字が苦手だが書き続けることが大事と思って書いている」「練習してきたから滑らかに話すことができる」「買い物は携帯メモか写メするので忘れない」など<障害に上手く対応できるよう努力・工夫している>、「(障害を持って)得たものは仲間、友達、支援者。失敗して気付き対応できるようになる」「人に頼らない、自分で考えることができたらいい」など<障害があっても前を向いて歩みたい>と感じていた。社会の障害理解については、「(障害を)社会にもっと知ってもらいたい。女性の立場で広めたい」など<社会の障害理解や社会参加を促進したい>という意欲を持っていた。

3. 《社会生活・家族生活上の困難や不安がある》

仕事選択や就労における不安や家族生活上の困り事、あるいは障害に伴う様々な不安があるという会話内容を《社会生活・家族生活上の困難や不安がある》とした。

就労については、「自分はこのままで良いのか。何の仕事をしたら良いのか」「職業センター実習中でハローワークに行くが(障害者の)採用は難しい」など<仕事選択・就労困難な社会的状況などへの不安がある>と、「親しい人が退職し新しい人が来るので不安」「元の職場にもう一度戻りたいが、復職してみないと分からない」など<職場環境の変化への不安がある>があった。<自己の健康への不安がある>は「寒さで痛いし動けない」「健康診断を受けた」ことなどであった。家族内では、「自分を心配してのことだが、決めつけて自分の話を聞かない」「一緒にいる時間が増えるとイライラしてくる」など<家族関係・家族役割上の困難感がある>、「子供を支える立場なのに(何もできなくて)やりきれない」「子供は言葉が喋り辛く、人が来るのを嫌う」「医療費がかかるし年金も減るかもしれない」など<家族生活上の懸念事項がある>、「母親が入院している」という<頼れる家族の不在による不安がある>であった。自己の障害については、「環境が変わるなど、少

しのごとで混乱する」「やり始めたら止められない自分に気付いた。掃除も次々とお風呂場までしてしまう」など、＜障害による生活上の不具合がある＞と実感していた。また、「(いつもと)違う環境で、やり慣れたことと違うと自分のペースでできなくなる」「薬を箱に入れているのに、新しい条件が付くと判断が難しくなる」など＜障害への対応が上手くできない不安がある＞ことを認識していた。

4. 《自分を支え守ってくれる環境がある》

自分の周囲に自分と家族を支えてくれる環境がある、またそのような環境に支えられているという実感を表す意味内容を《自分を支え守ってくれる環境がある》とした。

「職場で信頼できる一緒に作業をしている利用者さんがいる」「ジョブコーチが付いてくれた」など＜安心できる職場のサポート環境がある＞や、『『以前は何もできない状態だったよ(良くなった)』と子供に言われた』『妹が材料を買ってきてくれてケーキを作った。家族が美味しいと言ってくれた』『夫が家事をしてくれ、一緒に散歩に行ってくれる』など＜自分を理解し支えてくれる家族がいる＞、「子供と上手くいかない時、担当者が来て一緒に話をしてくれる」など＜自分と家族を支えてくれる専門職者がいる＞であった。また、「(他の当事者)2人の気持ちが分かる」「自分がわざとではなく忘れてしまうことも(他の当事者が)言ってくれる」などの＜共感し合えるピアサポーターがいる＞と感じていた。

5. 《自分の障壁となる環境や状況がある》

周囲の人や社会から障害や自分自身を理解してもらえず、自分らしくいられないことへの不満や辛さ、失望などを表す意味内容を《自分の障壁となる環境や状況がある》とした。

「買い物に行きたいが店までの交通の便が悪い(から行けない)」「色々したいことはあるが疲れるので減らさないといけない」など＜環境や健康状態によってやりたいことができない＞と、「内心思うけど『変えられると困る』と言わないようにしている」「心配してのことだが、やりたいことを制限される」など＜家族に理解してもらえない辛さがある＞、「高

次脳機能障害に関心を持っている人の中でも理解されていないことを感じた」という＜社会に理解されていないことを実感する＞であった。

【考察】

1. 社会の中での活動がもたらす自己肯定感と自己肯定感の低下

当事者は《自分も社会の一員として活動できている》という感覚、すなわち障害がある自分も社会で認められているという自己肯定感を抱いていた。さらに職場で新しい仕事や役割を任されることは《自分も社会の一員として活動できている》という自己肯定感を強める。また、趣味などの参加の場があること、家族の一員としての役割を持っていることも自己肯定感に繋がっていた。また、日々できている生活活動や上手くできた生活経験から、障害があっても日常生活が送れていることや、家庭内や職場などでの以前の役割が再びできるようになったこと、張りのある生活を送れていることに目を向けることが自己肯定感に繋がっていた。しかし一方で、日常的な社会生活の中での上手くいかない生活活動による自己の障害への気づきが自己肯定感の低下につながっていた。家族は当事者の障害への無自覚に苛立ちを感じると言われる⁴⁾が、当事者自身も＜障害による生活上の不具合がある＞ことをあらゆる場面で実感していた。そのため当事者の『障害認識』の状況と本人のペースに寄り添いながら適時適切なタイミングで、本人の行動を支援する存在³⁾や、『変わってしまった自己』に気づき、新たな自己への適応をもたらす⁸⁾ピアサポートが必要と思われる。特に、同じ障害をもち互いの状況に共感し合えるピアサポーターの存在は、当事者にとって自分を支え守ってくれる環境の一部となっていることが明らかになったことから、当事者同士の出会いの場である女子会の存在が重要であることが示唆された。

2. 障害があっても前を向いて努力を重ねることでもたらされる自己効力感

当事者は、自分でできるようになったことで自信を取り戻し積極的に生活に取り組むようになる⁹⁾。

本研究でも、当事者は<障害に上手く対応できるように努力・工夫(している)>しながら、様々なことに取り組み、努力を重ね、それを通して障害がありながらも前を向いて歩んでいる自己を自覚することで自己効力感を得ていた。小泉³⁾は、当事者は生活上の苦手や仕事上の苦手を実感するなかで、苦手に対する戦略を自身で創出し、戦略の成功体験を重ねていく経験を通じて「働く喜び」を見出し、就労継続自体が「使命感の萌芽」の原動力となると述べている。当事者は、社会の一員として活動できているという自己肯定感から、<就学・就職活動、将来の仕事への期待(がある)>を持ち、自らの将来を切り拓いていこうとしていた。また、自己の能力向上のための努力をし、自らの能力を使って人に役立ち認められる活動や自分がやりたいことに挑戦していた。その一方で、環境の変化や条件の変化があると<障害による生活上の不具合がある>ことなどを実感し自己効力感の低下をきたしていた。家族関係でも、子供である当事者が<自立した存在として家族に認められたい>と希望・期待を持つのに対して、母親である当事者は<家族関係・家族役割上の困難感(がある)>などを抱いていた。母親役割があることで自己肯定感を持つが、子供を支えるという役割や子供との関係性の難しさは、自己効力感の低下につながっていた。家族(子供)の支えが期待できない環境にある当事者には、それに代わる支援が必要と思われる。

3. 周囲の環境への安心感と不満・失望

家族、職場のサポート、自分と家族を支えるサービスがあることが《自分を支え守ってくれる環境がある》という認識となっていた。人との関係性、環境や条件の変化への対応が難しい当事者にとって、支えとなる周囲の人々は重要な存在である。一方で、当事者は《自分の障壁となる環境や状況がある》と感じており、家族や社会の障害無理解への不満とともに、環境や健康状態によってやりたいことができない悔しさを抱いていた。社会的な関係の中で再び自分が認められることは当事者の問題でもあるが、当事者を一員として受け入れ続けることができ

る社会の在り方でもある⁵⁾。当事者の主体的な活動の場と専門職にとどまらず様々な支援者の必要性がある⁶⁾。当事者が種々の参加の場で自己肯定感や自己効力感を持てるよう、社会に参加し易い環境づくりや、障害理解を基盤としたサポート体制の構築が求められている。

【文献】

- 1) 渡邊正樹, 南部泰士・他: 高次脳機能障害者の生活を共にするきょうだいへの影響に関する研究 - 現状と看護の方向性 -. 日本農村医学会雑誌 65(1): 55-61, 2016.
- 2) 高橋康子, 田中美幸・他: 高次脳機能障害者への自立支援への試み. 京都市立看護短期大学紀要 35: 155-161, 2010.
- 3) 小泉香織, 八重田淳: 働く高次脳機能障害者の声: 質的研究. 職業リハビリテーション30(2): 47-56, 2017.
- 4) 石元美知子, 和田寿美・他: 高次脳機能障害者と共に生きる家族が抱える問題 - 母親と妻の比較 -. 高知リハビリテーション学院紀要20: 1-8, 2019.
- 5) 山田規畝子: 高次脳機能障害者の世界から: 会話の力. コミュニケーション障害学30: 159-162, 2013.
- 6) 和田敏子: 地域で進めるあきらめない回復支援: 高次脳機能障害におけるコミュニティでの回復. コミュニケーション障害学29(1): 39-46, 2012.
- 7) 川喜田二郎: 続・発想法; KJ法の展開と応用, 中央公論社, 東京, 1970, pp48-219.
- 8) 中塚圭子: ピアサポートによる高次脳機能障害者の回復: 社会とつながるために. コミュニケーション障害学29(1): 32-38, 2012.
- 9) 伊藤順一郎: 訪問による自立訓練(生活訓練)を活用した地域移行及び地域生活支援の在り方に関する研究~高次脳機能障害領域の訪問(アウトリーチ)サービス~. 平成27年度厚生労働科学研究費補助金障害者政策総合研究事業総括・分担研究報告書: 91-105, 2016.

